第20回 市民参加、地域文化と持続可能な開発

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田 真里

1. 市民参加による総合計画とSDGs

ご承知のとおり、『行方市総合戦略（改定版）』が昨年（令和3年）11月に刊行されました。私もお手伝いさせていただいた、この新しい総合戦略は、前号で紹介した平成28年版の総合戦略を継承しつつ、新型コロナ禍への対応やSDGsへの取り組み等、新たな時代に即したものとなっています。

総合戦略の副題「市民と一緒に考える行方の未来」をまさに実践するのが、「行方ならではの価値の共有」に向けた、市民参加の過程を重視した行方市の総合戦略の策定・改定です。その中心となる「なめがた市民100人委員会」は全国的にも注目を集めています。こうした市民参加は、SDGsのターゲット16・7「あらゆるレベルにおいて、対応的、包摂的、参加型及び代表的な意思決定を確保する」を行方市において展開しているといえます。

2.「なめがた市民100人委員会」の意義と課題

行方市の100人委員会は無作為抽出方式を特長としています。その意義として、他の自治体等で一般的な「公募方式」や「推薦・一本釣り方式」に比べて、参加者の固定化・形骸化が起きにくく、これまで行政と接点が少なかった市民等の参加が可能とされます。これにより、生活実感に基づいて「自分ごと」として一緒に未来を創っていくことが期待されます。

とはいえ、見ず知らずの方々と、普段あまりなじみのない行政の施策について議論をするのは簡単なことではありません。私自身も地元の区長として、苦労した経験があります。

3. 市民参加を支える地域文化

こうした広範な市民参加を下支えする基盤として、地域社会の歴史や文化が大きな役割を果たしていると考えられます。行方市には多くの地区があり、区長、民生委員、消防団等が連携して「誰一人取り残さない」安心・安全の暮らしのまちづくりをすすめている住民参加の伝統があります。こうした地域社会の活動のいわば「接着剤」となっているのが、長い歴史を通じて地域住民の「価値の共有」となっている、行方市の文化財や伝統的な文化に基づく祭事・行事であるといえます。

大山守大場家郷士屋敷は初代水戸藩主徳川頼房の宿泊所として建立され、その歴史を今に語り続けているほか、映画のロケ等でも用いられています。古刹、西蓮寺は地域の代表である総代によって支えられており、多くの文化財を有するほか、常行三昧会等の伝統行事が行われています。また、麻生祇園の馬出し祭り、山田祇園祭りの暴れ神輿等の伝統ある祭事は、地域住民によって担われています。文化や歴史に基づく住民参加と価値の共有は、持続可能な開発に向けた地域資源として重要であるといえるでしょう。

▲大山守大場家郷士屋敷（筆者撮影）

令和4年度行方市SDGs推進アドバイザーを委嘱

市では、持続可能なまちづくりを推進していくために、SDGsの理念に沿った施政方針を表明しており、その理解を深めるための取り組みを行っています。SDGsにおいては、国際レベルと地域レベルでの観点が必要であることから、市の地域特性にあった取り組みを推進していくにあたり、野田教授には、令和元年10月から引き続きSDGs推進アドバイザーとして、専門的な見地から意見や助言をいただいています。

▲（写真左）茨城大学人文社会科学部 野田真里教授